



菅波 茂

04年7月25日。A M D A インドネシア支部長であるアンディ・フスニ・タンラ教授に對する外務大臣表彰式および記念祝賀会が、逢沢一郎副外相の臨席の下、岡山で開催された。表彰理由はA M D A インドネシア支部長としての人道援助活動、日本への留学生のお世話、日本文化の啓蒙普及活動だった。そして忘れてならないのは、渡辺幸勝・在マカッサル日本総領事の深いご理解と温かいご支援である。タンラ教授はインドネシアのスラウェシ島にあるハサヌティン大学の麻醉科の教授であり、広島大学大学院で医学博士号を修得した親日家である。

A M D A インドネシア支部はインドネシア国内のさまざまな災害被災者や東ティモール難民のみならず、遠くはアフガニスタン難民やイランの大地震の被災者救援活動など

にも果敢に医療チームを派遣している。理由はハサヌティン大学が東インドネシアの大きな領域を支える拠点大学であり、拠点大学としての積極的な使命感の発露である。なお、岡山大学は農学部および工学部で学術交流協定を締結している。大学の地球規模の平和や環境に対する貢献は知性の最高学府としての責務である。姉妹大学ネットワークとNGOネットワークの協力体制は国際貢献活動推進条例の先駆けになる予感がする。

A M D A が独立した東ティモールの国造りに参加することを決定したのは、ハサヌティン大学をバックにしたタンラ教授に率いられたインドネシア支部の協力があるからである。東ティモールには同大卒業者が医師を含めて少なからずいる。彼らを中心に設立するA M D A 東ティモール支部をインドネシア支部、ネ

東ティモールの国造りへの参加

パール支部をして岡山の本部が支援する計画である。具体的には、日本政府からユニセフを通して医療機関や保健センターに提供されている高性能の顕微鏡による検査内容の拡充や、助産婦に提供されている機器の使用説明に関する研修等である。驚いたことに、近い将来に東ティモールの首都であるディリとハサヌティン大学のあるマカッサル間でガルーダ航空の子会社が直行便を運航する計画があるそうだ。カトリックの国である東ティモールの奇跡なのだろうか。

7月15日から17日まで東ティモールを訪問した。旭英昭・駐東ティモール大使から日本が東ティモールの国造りに参加する意義を国益の視点からご教示いただいた。次の4点である。①国連主導の国造りを支援する実績②国連加盟半数以上の小国の視線への対応③国連総会一票の信頼獲得

④対立するインドネシア間との調停。更に、自衛隊による社会インフラ整備に対する地元からの感謝、JICAによる技術移転、そして日本のNGOによる保健や農業分野でのコミュニティ志向のすばらしい活動現場を紹介していただいた。「筆頭援助国である日本の存在感をますます高めるべく尽力する必要があります。そのためにも、東ティモールの存在を日本国民が忘れないように協力してほしい」と要請された。

東ティモール訪問初日にグスマン大統領にお会いできた。魅力的な人柄である。そしてヘビースモーカーである。「大統領は一国のシンボルであるから、喫煙による不健康には気をつけられたほうがよろしいのでは」との医師としての私の助言に対して、「大統領はストレスのシンボルでもありませんよ」と軽妙な答えが返ってきた。(アジア

医師連絡協議会代表)

題字は筆者